

障害のある人を対象としたオープン・カレッジの実施

— オープン・カレッジ in 美作大学・きんちゃい みまさかれっじ —

薬師寺明子 ・ 河本茂美 ・ 柴崎晃司 ・ 岩田直也

(おかやま発達障害者支援センター オープン・カレッジ in 美作大学のみ)

I. はじめに

1. オープン・カレッジとは

近年、高等学校卒業後の大学・短期大進学率が50%を超えている。また、多くの人が市民講座や老人大学、カルチャーセンター等で生涯学習、生涯教育等として学ぶ機会を得ている。しかし、知的障害のある人の場合は特別支援学校卒業後、大学等の高等教育を受ける機会がないのが現状である。学習機会の少ない知的障害者を大学に招き、講義を受けてもらうという取り組みのことをオープン・カレッジという。

オープン・カレッジは1995年、東京学芸大学において、大学教員や付属養護学校(現在は特別支援学校)、多摩地域の養護学校教員の教員等で構成している「養護学校進路指導研究会」が、特別支援学校を卒業した知的障害のある人を対象に大学公開講座「自分を知り、社会を学ぶ」を開講したのが始まりである。1998年に大阪府立大学安藤研究室がオープン・カレッジとして活動を始め、活動に賛同した大学関係者を中心に広がりを見せ、1999年度には武庫川女子大学、2000年度には桃山学院大学が開講した。その後、宮城大、徳島大等でも開講し全国的に広がった^{1) 2)}。

オープン・カレッジには三つの理念①知的障害者の人権(教育を受ける権利)の保障、②知的障害者の変化(発達)の可能性の保障、③地域社会に対する大学の貢献がある。オープン・カレッジは知的障害のある人に、ただ学ぶ場を提供するだけではなく、「教育権」や「発達保障」について実践を通して実現しようとする取り組みである。

2. 本報告について

本報告は、発達障害者支援センターと協働で実施している、発達障害のある高校生を対象とした就労準備支援「オープン・カレッジ in 美作大学」及び、学生が主体となって実施している知的障害のある人を対象としたオープン・カレッジ「きんちゃい みまさかれっじ」についての実践内容である。

II. オープン・カレッジ in 美作大学

1. 実施背景

近年、発達障害のある人への支援について多くの課題があり、社会的にも注目されている。特に知的障害を伴わない発達障害のある人は、利用できる福祉サービス等が少なく、高等学校、専門学校、大学等を卒業後は就労という進路が中心になってくる。そのため、今後求められる支援体制の1つとして、「就労準備に取り組む場」が求められている。

おかやま発達障害者支援センター県北支所(以下;支援センター)においても、普通高校等に在籍する生徒からの就労相談が、多く寄せられている。しかし、職場体験の機会が少なく、就労イメージを持ちにくい現状があり、就労準備のための資源が求められている。この現状の課題解決にむけて、支援センターから美作大学へ協力の提案があった。そこで、両機関が協働し、発達障害のある人を対象としたオープン・カレッジを企画・実施した。なお、平成25年度は試行的な実施、実践報告として地域生活科学研究所を主催とするシンポジウムを実施することで、地域へ活動を公開し、平成26年度より本格的な実施となった。平成27年度より、地域生活科学研究所からの助成を得て毎年実施している。なお、平成29年度より、高等学校へ向け実施する「事前講座」を実施している。

2. 実施内容

1) 企画:筆者及び支援センタースタッフ

2) 実践者:

①全体の運営:筆者及び支援センタースタッフ

②参加者へのサポーター及びスタッフ:美作大学社会福祉学科薬師寺研究室ゼミ生(3年生・4年生)。

③講義の際の講師:看護師資格を持つ大学教員、キャリアコンサルタント資格を持つ大学職員

④模擬作業:大学附属図書館職員・事務作業提供

3) 対象:普通高校に通う発達障害のある人で、就労にむけた準備に意欲があり、学校に安定して通うことができている状態にある人。定員8名。参加にあたっては、所属校の担任、特別支援教育コーディネーター、相談室の教諭が、参加者・保護者と相談の上、申し込む形式をとった。また、①参加者・保護者にプログラム概要の説明、②保護者や所属校の担任等から参加者の配慮点の聞き取り、③参加者同士のグルーピングの検討、④参加者と学生サポーターのマッチング等を目的に、支援センターが所属校への事前訪問を実施する。

4) 倫理的配慮:プログラムの評価研究に関する参加者への同意および個人情報の記載等については、事前訪問時に参加者に説明を行い、書面にて同意を得る。

3. 実施の流れ

1) プログラム実施前:支援センターが参加者の所属校に事前訪問を行い、得られた配慮点等の情報をもとに運営スタッフ全員で企画会議にて共有する。

2) プログラム期間:1クール2日間とし、土曜日を利用し、1回5時間程度(表1)。

表1 当日のスケジュール

1日目	2日目
オリエンテーション(15分)	
講義Ⅰ(45分) (アンケート記入含む)	講義Ⅱ(45分) (アンケート記入含む)
休憩(10分)	休憩(10分)
マナー講座Ⅰ(20分)	マナー講座Ⅱ(20分)
グループワーク(30分) (アンケート記入含む)	グループワーク(30分) (アンケート記入含む)
昼休憩(60分)	昼休憩(60分)
模擬作業Ⅰ(90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)	模擬作業Ⅱ(90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)
グループワーク(30分) (アンケート記入含む)	グループワーク(30分) (アンケート記入含む)
	全体の振り返り(15分) (アンケート記入含む) 修了証書授与

3) プログラム内容:「働くことを知る・学ぶ」をテーマとして、①講義、②マナー講座、③模擬作業を実施(図1)。それぞれの内容を振り返るため、実施直後にアンケート記入し、それらをもとにグループワークを実施した。プログラム終了後は、当日参加したスタッフで事後ミーティングを実施。

4) 参加者及び支援者の動き:参加者の定員は8名、グループワークと模擬作業は2グループ(4名ずつ)に分かれて実施。なお、グループ分けは参加者の個性を配慮した。支援者として、学生が個別に「学生サポーター」として、2日間のプログラム全体を通して参加者が困った時や分からない時のサポート役

を担った。学生スタッフは実施中の準備や片づけ、模擬作業の際の見守り等を行う。

内 容 と 役 割 分 担		
講 義	講義Ⅰ 「働く上で大切なコミュニケーション」 (キャリアコンサルタント資格を持つ 大学職員が担当) ①学校と職場の違い ②挨拶について ③報告・連絡・相談 (ハウレンソウ)について	講義Ⅱ 「基本的生活習慣の大切さ」 (看護師資格を持つ大学教員が担当) ①学校と職場の違い ②朝ご飯を食べること ③睡眠時間の確保 ④朝の準備や段取り ⑤身だしなみを整える
	マナー講座Ⅰ (社会福祉学科の学生が担当) ①挨拶と報告をする時は ②作業中の指示 ③質問をするタイミング	マナー講座Ⅱ (社会福祉学科の学生が担当) ④寝る前の過ごし方 ⑤出勤の際に ⑥身だしなみの整え方
	模擬作業Ⅰ 「図書館作業」 (附属図書館職員が担当) ①抜き取り作業 ②返却作業	模擬作業Ⅱ 「事務作業(実習日誌作成)」 (支援センター職員が担当) ①ラベル印刷 ②ラベル貼り ③用紙のとり込み

図1 プログラムの内容と役割分担

5) プログラム実施後：支援センターが参加者の所属校を訪問（事後訪問）し、保護者、担任、特別支援教育コーディネーター、相談室教諭等に可能な範囲で同席してもらい、参加者にプログラムの感想等を聞き取る。また、プログラムを通して得られた今後の就労準備に関して、家庭生活や学校生活（学外実習等）で取り組みそうな点について提案。後日、総括としてスタッフ（学生除く）で反省会を実施。

4. 実施について

実施予定日：2018年6月2日（土）9日（土）

※参加希望高等学校との日程が合わず開催を見送った。

5. 出前講座

オープン・カレッジの内容を高校授業の2時間分にまとめて、地域の高等学校で実施する取り組みである。昨年度より希望する高等学校で実施している。

1) 実施内容

授業名：出前講座～働くことを知る・学ぶ～

実施日：2018年12月14日（金）2・3時限目

（9:45～11:35 間に10分休憩）

対 象：A 高校2年生 17名

実践者：

①企画・運営：筆者及び支援センタースタッフ

②参加者へのサポーター及びスタッフ：美術大学社会福祉学科薬師寺研究室ゼミ生（3年生・4年生）。

③講義の際の講師：看護師資格を持つ大学教員、キャリアコンサルタント資格を持つ大学職員

表2 出前講座スケジュール

時 間	内 容	備 考
9 時 45 分 ～ (5M)	オリエンテーション	
9 時 50 分 ～ (20M)	講義① 「学校と職場の違い」 「基本的生活習慣の大切さ」	チェックリストは、1時間目に記入
10 時 10 分 ～ (15M)	マナー講座①	*場面ごとに質問に記入
10 時 25 分 ～ (10M)	休憩	
10 時 35 分 ～ (20M)	講義② 「働くうえで大切な コミュニケーション」	
10 時 55 分 ～ (15M)	マナー講座②	*場面ごとに質問に記入
11 時 10 分 ～ (25M)	グループワーク (アンケート記入と共有)	4グループに分かれて、アンケート内容を共有 *美大生が進行役

2) プログラム内容

①講義：職場で働くうえで必要となる知識に関する講義。パワーポイントを用いて各講義は約20分程度。

「働く上で大切なコミュニケーション」：学校と職場の違いを整理すると共に、挨拶について、報告・連絡・相談（ハウレンソウ）の大切さについての講義を行った。講師はキャリアコンサルタント資格を持つ大学職員。

「基本的生活習慣の大切さ」：学校と職場の違いを整理すると共に、朝食の必要性、睡眠時間の確保、朝の準備や段取り、身だしなみについて講義を行った。講師は看護師資格を持つ大学教員。



写真1：講義の様子

②マナー講座：講義内容をより具体的な場面で示すため、学生が軽演劇を行う。一つの講義に対して各3つの場面で構成している。一つの場面を見終えた直後に、そのテーマについてワークシートを用いて整理した。

マナー講座Ⅰ：「働く上で大切なコミュニケーション」の講義内容に連動して、テーマは、「挨拶と報告をする時のやりとり」、「作業中の指示の受け止め」、「質問をするタイミング」の軽演劇を行った。

マナー講座Ⅱ：「基本的生活習慣の大切さ」の講義内容に連動して、テーマは「寝る前の過ごし方」、「出勤前の準備の大切さ」、「身だしなみの大切さ」の軽演劇を行った。



写真2：マナー講座の様子

③グループワーク：支援センター職員がファシリテーター役となり、2グループに分かれて行った。参加者と学生サポーターが並んで座り、発言に困った時等に支援を行った。内容は、講義やマナー講座での参加者の学びや気づきを取り上げ、参加者同士で共有した。



写真3：グループワークの様子

3) 実施結果及びまとめと今後の課題

大学から教員や学生が生徒に関わることで、生徒の関心が高

く、前向きな感想が多くあった。この講座を受講することで、新たに生徒の課題も見えてきた。グループワークは学生スタッフがファシリテーターとなることで、親しみやすく、生徒の積極的な参加や発言につながった。実施後、参加生徒がプログラムを通して学んだ知識や気づきを、いかに日常生活や、その後の職場実習等や進路指導の中で活かすことができるかが課題となる。今後は、参加生徒の準備性の確認（参加の動機づけ）を高校側との連携の中で整理し、丁寧なプログラムへの導入が必要である。

日々の直接支援・間接支援からみえてきた地域の現状や課題を把握・整理し、関係機関との共有・協働しながら、課題解決に取り組んでいる。今回のプログラムの企画・実施は、“地域の資源創出”という意味もある。普通高校に通う発達障害のある人の就労準備としての資源創出に留まらず、各高校における発達障害のある生徒に関するニーズの掘り起こしや、就労準備の視点で進路指導につなげられることが望まれる。

また、人材育成機関である大学が、支援センターと協働することで、大学側の強み（教職員の専門性、地域に密着した学内施設の利用、学生の参加）を活かし、社会資源として提供することができた。そして、学生にとっては、知的障害を伴わない発達障害のある人の支援に携わることができ、支援技術の学びにつながった。

今回の実施にあたり、他校の教員、教育庁から見学があった。近年、高等学校における特別支援教育の推進が進められており、2018年度には、高等学校による「通級による指導」がスタートした。普通高校における発達障害のある人への教育に関しては課題が多くあり、今後この取り組みが高等学校での教育の中で汎用されることに期待したい。

Ⅲ. きんちゃい みまさかれっじ

1. 実施背景

2014年度3年生のゼミ生がオープン・カレッジを企画し、2015年度から「学習機会の少ない方を大学に招いて講義を受けてもらう。」「大学の講義で得た知識や経験を基に、地域でいきいきとした生活を送ることにつながってほしい。」という目的としてスタートした。

2015年度	前期:1日目「文化人類学」(全体講義)「英会話」「音楽」(選択講義) 2日目「料理」交流会 後期:1日目「工作」「恵商法対策講座～あきらめない～」 2日目「科学実験」交流会
2016年度	前期:1日目「パソコン」「マナー講座」 2日目「栄養学」「護身術」交流会 後期:1日目「和菓子作り」「茶道」 2日目「災害学習」交流会
2017年度	前期:「ストレッチ」「口腔ケア」 後期:「フラダンス」「経済学」

2. 実施内容

2018年度4年生のゼミ生8名、3年生のゼミ生5名が企画し、実施した。

1) 実施日及び科目

- 1回目:2018年10月13日(土)
オリエンテーション・防災学・工作・振り返り
2回目:2018年11月10日(土)
歴史学(津山)・ボッチャ・振り返り

2) 参加者

- 1回目:防災学4名・工作7名
2回目:歴史学4名・ボッチャ5名(2名入れ替わり)

3) 講義内容

①防災学:講師は非常勤講師の大西一嘉氏。知的障害のある人に分かりやすく防災についての講義。

②工作:講師は幼児教育学科の中田稔氏。テーマがハロウィーンで、LEDライトを使ったランタンとバッジを作成した。



写真4:工作の様子

③歴史学(津山):講師は津山の劇作家の山田美那子氏。津山に古くから伝わる昔話「椿女房」を大きな絵巻物を朗読劇で紹介した。学生も配役があり、一緒に朗読した。



写真5:歴史学(津山)の様子

④ボッチャ:講師は岡山ボッチャ協会から3名。施設職員でもある講師2名と障害のある協会員が講師となって、参加者と一緒にゲームを通じて実施。



写真6:ボッチャの様子

4) 実施結果及びまとめと今後の課題

学生主体で実施しており、講座当日までに様々な行程がある。講義内容の検討、講師探しと連絡調整、参加者募集の広報活動、講師との打ち合わせや当日資料のルビふり等、多くの準備をして、当日を迎えている。4年生が後輩につなげていけるよう、引継ぎをしながらの準備となっている。

参加者は科目の内容によるが、例年より多くの参加があった。両日とも振り返りを実施しており、講義内容や、今後の希望等も学生が参加者から直接聞き、参加者と学生で共有している。参加者の意見を参考にしながら、今後の企画につなげていきたい。小さい活動ではあるが、岡山県でオープン・カレッジを実施している大学は本学だけである。この活動を大切に、今後につなげていきたい。

参考文献等

- 1) 建部久美子編(2001)「知的障害者の生涯教育の保障ーオープン・カレッジの成立と展開」, 明石書店。
- 2) 杉本正・兼松美幸(2010)「実践報告『オープン・カレッジの展開』」, 帝塚山大学心理福祉学部紀要。